萬葉集略解

十九上

和書門 類 二〇四三五 號 九八 函 二〇 架 三 冊

内閣文庫 和書 類 二〇四三五 號 三〇 冊 三ニ三 函 一九 架

内閣文庫		
番號	和 20435	
冊數	30 (27)	
函號	263	42

国立公文書館 National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

萬葉集巻第十九

天平勝寳二年三月一日之暮詠桃李歌二首○見翻翔鴫作歌一首（本文見の下飛の字あり）○二日攀柳黛思京師歌一首○攀折堅香子草花歌一首○見歸雁歌二首○夜裏聞千鳥喧歌二首○聞曉鳴鵼歌二首○遥聞泝江船人唱歌一首○三日越中守大伴宿祢家持之舘宴歌三首○八日詠白大鷹歌一首并短歌（今本日を月ニ誤 本文ニ依て改）○潜鸕歌一首并短歌○過澁溪崎見巖上樹歌一首（例によるに九日とあるへし）○悲世間無常歌一首并短歌○豫作七夕歌一首　○慕振勇士名歌一首并短歌（慕と暮ニ誤 本文ニ依て改）○詠霍公鳥并時花歌一首并短歌（花の上時の字を脱 本文ニ依て補）○為家婦贈在京尊母所誂作歌一首并短歌○二十三日詠霍公鳥作歌二首○贈京

図書局文庫
内閣文庫
日本政府図書
浅草文庫

丹比家歌一首○二十七日追和筑紫太宰之時春花梅
歌一首○詠霍公鳥歌二首○四月三日贈越前判官大
伴池主霍公鳥歌不勝感舊之意述懐歌一首并短歌
○不飽感霍公鳥之情述懐作歌一首并短歌○四月五
日従京師贈来歌一首○詠山振花歌一首并短歌○六
日遊覧布勢水海作歌一首并短歌○九日贈水烏越前
判官大伴池主歌一首并短歌（鳥を鳥ニ誤本文ニ依テ改）○詠霍公鳥并
藤花一首并短歌○更怨霍公鳥哢晩歌三首○贈京人
歌二首○十二日遊覧布勢水海望見藤花各述懐謌四
首（本文海の下船泊多枯灣とあり）○恨霍公鳥不喧歌一首○見攀折保寳
葉歌二首○守大伴家持仰見月光歌一首（本文ニ還時濵上とあり）○
二十二日大伴家持贈判官久米廣繩霍公鳥怨恨歌一

首并短歌○二十三日掾久米廣繩和家持作歌一首并
短歌（本文詠霍公鳥とあり）○五月六日大伴家持同處女墓歌一首
并短歌（本文追和處女云々とあるハ誤れり）○贈京丹比家歌一首○二十七日
大伴宿禰家持吊聟南右大臣家藤原二郎之喪慈母挽
歌一首并短歌（弔を弓ニ誤、本文母の下患の字あり）○霖雨晴日作歌一首○見
漢夫火光歌一首○六月十五日見芽子早花歌一首（芽を
芽ニ誤る）○大伴氏坂上郎女従京師来賜女子大嬢歌一首
并短歌○九月三日宴歌二首○幸吉野宮時藤原皇后
御作歌一首（皇后藤原皇右とあるハ誤之本文ニ依テ改）○十月十六日餞朝集使
少目秦伊美吉石竹時大伴家持作歌一首（大伴の上守の字あるへし）○
十二月大伴家持雪日作歌一首○三形沙彌贈左大臣
歌二首（此目録誤れり左註ニ三形沙弥承贈左大臣藤原此卿之語作誦之也云々とあれバ承字あるへきなり）○天平勝

寳三年正月二日零雪殊多守大伴宿禰家持館宴歌一
首○三日介内藏忌寸繩麻呂館宴樂時大伴家持作歌
一首○同日掾久米朝臣廣繩作歌一首 本文ニ于時積雪云々の諸詞あこハ畧なり
○遊行女婦蒲生娘子歌一首○同日酒酣更深鷄鳴内
藏伊美吉繩麻呂作歌一首　守大伴家持和歌一首○
太政大臣藤原家之縣犬養命婦奉天皇歌一首○悲傷
死妻歌一首并短歌○二月二日判官久米廣繩以正税
帳應入京師仍大伴家持作歌一首 本文三日とあり ○四月十六日
大伴家持詠霍公鳥歌一首○春日祭神日藤原太后賜
入唐大使藤原朝臣清河御作歌一首　大使藤原朝臣
清河歌一首　大納言藤原家餞入唐使歌三首○天平
五年贈入唐使歌一首并短歌○阿倍朝臣老人遣唐時

奉母悲別歌一首○七月十七日越中守家持時遷任少
納言作悲別歌贈貽朝集使掾久米廣繩館二首 守の下大伴の字脱
○八月四日内藏伊美吉繩麻呂館設國厨之餞大帳使
大伴家持時家持作歌一首 餞の上饌の字あり ○五日平旦大帳使
大伴家持和内藏伊美吉繩麻呂捧盞歌一首 本文ニ五日平旦上道仍国司次官已下云々の諸詞あこハ略なり ○正税使掾久米朝臣廣繩事畢退任遇越
前国掾大伴池主館時久米廣繩詠芽子花作歌一首
大伴家持和歌一首○向京路上依興預作侍宴應詔歌
一首并短歌○爲壽左大臣橘卿預作歌一首 々壽の字を脱 ○十
月二十二日於左大辨紀飯麻呂朝臣家宴歌三首○壬
申年亂平定以後歌二首○閏三月於衛門督古慈悲宿
禰家餞之入唐副使同胡麻呂等歌二首 閏三月の上天平勝宝四年とあるべし古慈悲

の名の上大伴の氏を脱せり○高麗朝臣福信遣難波賜肴酒入唐使藤原朝臣清河等御歌一首并短歌○大伴家持為應詔儲作歌一首并短歌○天皇太后共幸於大納言藤原卿家時賜黄葉澤蘭於大納言藤原卿并陪従大夫御歌一首本文澤蘭一株抜取令持内侍佐々貴山君とことゝあるを略り卿を卿ぬ誤○十一月八日太上天皇於左大臣橘朝臣宅肆宴歌四首○二十五日新嘗會肆宴應詔歌六首○二十七日林王宅餞但馬按察使橘奈良麻呂朝臣宴歌三首○五年正月四日於治部少輔石上朝臣宅嗣家宴歌三首○十一日大雪述拙懐歌三首本文積尺有二寸とあることを略せり○十二日侍内裏聞千鳥喧歌一首○二月十九日於左大臣橘家宴見攀折柳條歌一首○二十三日依興作歌二首○二十五日詠鶬鶊歌一首

天平勝寳二年三月一日之暮眺矚春苑桃李花作歌二首　以下なほ家持越中での歌也

春苑紅爾保布桃花下照道爾出立𡢳嬬

はるのそのくれなゐにほふもゝのはなしたてるみちにいでたつをとめ

花のにほひをとめが桃の木のもとに出たてるが花をともめてたる詞をほめていへるさまなり。たてるの詞は花をさしてもひとへに見えて出

吾園之李花可庭爾落波太禮能未遺有可母

わがそのゝすもゝのはなかにはにちるはだれのいまだのこりたるかも

雪の斑に降るごとく、巻十三にはだれのふる雪のまだらにふる

見飛翻翔鳴作歌一首　春まけて月にみゆるをしあればみえとたし

あらん、一本飛の字なし

春儲而物悲爾三更而羽振鳴志藝誰田爾加須牟

をるまけてものがたりきくよさよふけてをぞきくあくるきたゞるふつをむ
をぶきハ羽を振ふ、やまどきハ尾振とあり、又此なる羽翮もしかるれバしかさえ
みなよし訓べし、須充磨本頒とるくしまむと点せり

二日攀柳黛思京師歌一首

春日爾張流柳乎取持而見者京之大路所思

はるのひにはれるやなぎをとりもちてみればみやこのおほぢおもほゆ
はれるハ芽のはりつるを、春十やうちしもひくるをごりたるはる柳のさまにて
たてればかのかひつししほり、京の大路の柳をおもひ出るゝ

攀折堅香子草花歌一首

物部能八十乃嬬嬬等之挹乱寺井之於乃堅香子之花

もののふのやそのをとめがくみまがふてらゐのうへのかたかごのはな
もののふの枕詞、やそのをとめハあまたの女といふ、等ハ八十といふのる振て

さるのそ、挹字ちま一入切音揖、酌也とあて、寺井ハてで寺の井、又地名
のくそまづふハあまたの女の汲むとく、彼ちよさまをりよ、六帖本の歌
よもののふのやそをとめらがふみとよむてらゐのうへのかたかしの花
とて載たり、他説おぼ此その歌句古点ハかたこのしのそなと点せり、
先をかたこのごのをなとよむでーくし、かたこで又ハゐのたつなとしりまた
花咲ふ花ゑへ、其花の色ハ紫色なりて、翁のそ越のくにてハかたこ、
みちのくまてハかたくりといひて、根ハ百合のごとく、葉ハ二一寸ばかりー
あさく、花て又一かたとゑく、ちそれのむくらなる紫色ハされど花は
よれバ大ちハらで、かたこのしとりいふまとこのをさへハ増翎な草とあとを
俊ハ謡て大てる おかつのあしといひれき、枕な堅香子と書訓
を交つくかきうしとよむべき根あるれバ必かたかごへ、其かたかごハ
彼かたこかたくりなどいへる物也、越までハかたこゆりといひて、かた

くもりハかくこゆりのほりしてゐるぞえ

見歸雁歌二首

燕来時爾成奴等鴈之鳴者本郷思都追雲隠喧

つばめくるときになりぬとかりがねはくにおもひつゝくもがくりなく

月令曰孟春之月鴻鴈来是月也玄鳥至注云玄鳥燕也和名抄鷰豆波久良米白脰小鳥也本郷古点ふるさとゝあれど集中ふるさとゝよめるハすべて古京の地をいひて、あらたにとゞまるさとゝよめるはなし、巻十わがやどになきしかりがね雲のうへにこよひなくなり国へかもゆくとよみたればこゝもくにとよむべし

春設而如此歸等母秋風爾黄葉山乎不超来有米也

はるまけてかくかへるとも秋かぜにもみでむやまをこえこざらめや

一云春去者歸此鴈（ハルサレバカヘルコノカリ）

夜裏聞千鳥喧歌二首

夜具多知爾寝覺而居者河瀬尋情毛之奴爾鳴知等理賀毛

よぐたちにねざめてをればかはせとめこゝろもしぬになくちどりかも

よぐたちハ夜のくるをいふ、今もしぬにハゆく人のみも萎へまするなど、三句よりあとへつゞけてみるべし

夜降而鳴河波知登里宇倍之許曽昔人母之奴比来爾家禮

よぐたちてなくかはちどりうべしこそむかしのひともしぬびきにけれ

むかしより千どりの群をあはれといひきたるとの意にあひなてうたへる

聞暁鳴鴙歌二首

栰ヲ栰ニ誤

泝ヲ沂ニ誤

椙野爾左乎騰流鴙灼然啼爾之毛将哭己母利豆麻可母
すぎのぬまさをどるきゞしいちじろくねにしもなかんこもりづまかも
すぎの野越中なるべし、さをどるのさハ発語、室もりの句の語
の勢をとりて、これハ雉のいちじろく鳴をとがめるさまにて、かもハかハの
きこえこもりづまにハとがめてよめるかく後ていつる心にてかくづまをされバにゐる
ゆへバとてもかくいちじろく鳴べきまじのハとゝといて此雉をよめるべし
足引之八峯之鴙鳴響朝開之霞見者可奈之母
あしびきのやつをのきゞしなきとよむあさけのかすみみればかなしも
やつをハ上峯のかさなれるをいふ、条中やつをのつゞきとよしよめり
遥聞泝江船人唱歌一首
朝床爾聞者遥之射水河朝己藝思都追唱船人
あさどこにきけばはるけしいみづかはあさこぎしつゝうたふふなびと
あさ床起出ざるほどのきこゆる
三日守大伴宿禰家持之舘ニ宴歌三首
今日之為等思標之足引乃峯上之櫻如此開爾家里
けふのためとおもひてしめしあしびきのをのへのさくらかくさきにけり
今日の為とおもひしめつる
奥山之八峯乃海石榴都婆良可爾今日者久良佐禰丈夫之徒
おくやまのやつをのつばきつばらかにけふはくらさねますらをのとも
上ハつばらといはん序也、つばらハつまびらかといふに同じ
くらせといふこと也、巻十八かぢの音のつばらつばらにわぎへしおもほゆ
漢人毛栰浮而遊云今日曾和我勢故花縵世余
からびともふねをうかべてあそぶといふけふぞわがせこはなかづらせよ

筏字まては同筏と音罰桴也船也とあれハ今本栰とあるハ誤也かの国
みくに日にる水に遊ふ子にかさりつくゆへ花筏ハ時の花を多く貫て
かつらふかくるなるへし

八日詠白大鷹歌一首并短歌

安志比奇能山坂超而　去更年緒奈我久科坂在故志
あしひきのやまさかこえて　ゆきかへるとしのをなかくしなさかるこし
爾之須米婆大王之敷座國者京師乎母此間毛於夜自等
にしすめはおほきみのしきますくにハみやこをもここもおやしと
心爾波念毛能可良語左氣見左久流人眼　乏等
こころにハおもふものからかたりさけみさくるひとめ　ともしみと
於毛比志繁曾己由惠爾情奈具也等　秋附婆　芽子
おもひししけしそこゆゑにこころなくやと　あきつけは　はぎ

開爾保布石瀬野爾馬太伎由吉氏乎知許知爾鳥布美立
さきにほふいはせのにうまたぎゆきてをちこちにとりふみたてて
白塗之小鈴毛由良爾安波勢也里布里左氣見都追伊伎
しらぬりのこすずもゆらにあはせやりふりさけみつついき
騰保流許己呂能宇知乎思延宇禮之備奈我良枕附
どほるこころのうちをおもひのべうれしびながらまくらつく
都麻屋之内爾鳥座由比須惠氏曾我飼真白部乃多可
つまやのうちにとぐらゆひすゑてぞわがかふましらふのたか

初二句ハゆきこのつるといへる序にて、さきにほふてゐる梅侚、さきまちて国ハ
こゝに出でゝやまとをしくわが大王の京国ハやまとにても同じとぞお
そふとある心也。故やどハかれたるかなしくみさけをさかる人め、まさる
とひさくるうらなるからなき国よ、出でたる此方をとふひさん

きらぎらしみえておりひてんをやりかへて人をやるとのこゝろをいはせ野は和名抄越中新川郡石勢伊波世とあり、この野也、うるはしきゆげて、手綱をとりゆきてといへり、古今集あまのなでしこぎいさりせんとおもひたまひし、ゐるふることにては、本集三冬のかすみなるみこそて、巻十七に鈴精といふつるくて冬のかすみなるとて、とよめり、白塗の矢をいひ、巻十七わがおもふ白ぬりの鈴とりつけてうちよそふ、そこにいひつゝ、そのゆくは、ことゆくにて、その句のかなへるなり、ゆらはまほろしむの時ある言をとりて、神代紀に搶しの字を用、いきどほるは、神功紀忍熊王逃田而沈まりたる処をいまだ探出さでまじる時、武内宿禰の歌に、あふみのみせたのわたりにかづくとりめかしええは異本伊佛迦倍呂志茂 宇陀作伊支度保留又伊多弥字礼不又惛伊支止呂志とよめり、ひとかどは此巻のうたは随のことのくするをもちいにとりてこゝろのなかの句とは

耳ハ爾ノ誤

是は袖にまくる鷹、つまやの内にとぐらゆひすゑてぞ我飼は、反言にやどにもあるとしよめれば、奥深く屋の内にとぐらゆひて居(スヱ)おくなり、とぐらのとは節(フシ)のこと、今切(キリフ)生るといへり

反歌

矢形尾乃麻之路能鷹乎屋戸爾須恵可伎奈泥見都追飼久之余志毛

やかたをのましろのたかをやどにすゑかきなでみつゝかはくしよしも

巻十七やかたをの鷹のことは見えたり、かきなでゝは愛するさま也、巻三云うつせみの浮世にすて掻撫ぞねぎたまふ、かへりこむ日

右件しは物語

潜鸕(ウカハ)歌一首并短歌　上本并短歌の三字を脱、一本に依て補

荒玉能年往更春去者花耳爾保布安之比奇能

あらこまのとしゆきかへりはるされバそゐさきまなよあしびきの
山下響　墮多藝知　流辟田乃河瀬爾　年魚児
やましたとよみおちたぎちながるるさきたのかはのせにあゆこ
狭走　島津鳥鸕養等伴奈倍可我理左之　奈津左比由氣
さばしるしまつとりうかひともなへかがりさしなづさひゆけ
波吾妹子我可多見我氏良等紅之八塩爾染而　於己勢
バわぎもこがかたみがてらとくれなゐのやしほにそめておこせ
多流服之襴毛　等寶利氏濃禮奴
たるころものすそもとほりてぬれぬ

耳ハ開の伝なるべし、さき田ハ越中、島つる鵜也、ともなへハ令伴
之此下のちとのうしますゆゑとゝまらでとゞむ、さて越の部中
おくハ多く川へおちるちく鵜を飼ぞ、ここの多摩川などハ川瀬

旅なれバ此の世の、え（？）よりくまづさひゆけバといひ又衣のそでも
とほりてぬれぬとよめり、巻二吉衣手ハ表りくぬれぬとよみて、
ここハ衣のでのつまねの衣おく治とあるをいふ

反歌

紅衣爾保波之辟田河絶己等奈久吾等眷年
くれなゐのころもにほハしさきたがハたゆることなくあれかへりみん
巻一これどあかぬよしのの河のとこなめのたゆることなくまたかへりみん
とつるよりよまれし也、此本眷とると、元暦本春とよりよす

毎年爾鮎之走婆左伎多河鸕八頭可頭氣氏河瀬多頭禰
年
としのはにあゆしはしらバさきたがハうやつかづけてかハせたづねむ
あゆしのしハ助辞、やつハ数多きことにいふ、かづけてハかづらせてと治之

季春三月九日擬出擧之政行於舊江村道上属目物花之詠并興中所作之歌　目録よハ此端詞なし、されハ以下も短歌合

過澁谿埼見巖上樹歌一首　樹名都萬麻

十その趣標あるべし、舊江村ハ射水郡之

礒上之都萬麻乎見者根乎延而年深有之神佐備雨家里

いそのうへのつまをみれバねをはへてとしふかゝらしかんさびにけり

いそとハ石をいひて、そこのいそのうへハ礒のあたりをいふ。つまゝ いまハ考

へぞ樹名とことほとのうハ越中のもとの木ともゆ、よりも葦附水

松類也と注せるがよし、年深のらしハ考三ふるき堤の年深こと

よみて、年久しきことをいふ

悲世間無常歌一首并短歌

天地之　遠始欲　俗中波　常無毛能等　語續

あめつちの　とほきはじめよ　よのなかは　つねなきものと　かたりつぎ

奈我良倍伎多禮　天原振左氣見婆　照月毛盈昃之家里

ながらへきたれ　あまのはら　ふりさけみれば　てるつきも　みちかけしけり

安之比奇能山之木末毛春去婆花開爾保比秋都氣婆

あしびきの　やまのこぬれも　はるされば　はなさきにほひ　あきづけば

露霜負而風交毛美知落家利宇都勢美母如是能未奈良之

つゆしもおひて　かぜまじり　もみぢちりけり　うつせみも　かくのみならし

紅能伊呂母宇都呂比奴婆多麻能黒髮變　朝之咲

くれなゐの　いろもうつろひ　ぬばたまの　くろかみかはり　あさのゑみ

暮加波良比吹風能見要奴我其登久逝水能登麻良奴

ゆふべかはらひ　ふくかぜの　みえぬがごとく　ゆくみづの　とまらぬ

其等久常毛奈久宇都呂布見者爾波多豆美流涕等騰米

ごとくつねもなくうつろふ見れば。にはたづみながるゝなみだとゞめ
可禰都母
かねつも
ちゞめよのよハよのなかのことなりときこゆれハ。巻十八きらよきこともなきを
いふとも今のをてらしたるなかのさくるといつるを同じく。まへの歌のうへ
わるきりよきをきゝしれバのバをおもひけり。うつせみハ現身と。仁の
意もうつろひハ仁都の意もとしらん。船の意ぞこそ。にはたづみが衰
るといひとりハ。からうひハかはりを延ていふ。ゆく風のこと。ゆくみのなく
巻十五挽歌のうへ。行水のかへらぬごとく。吹風のみえぬがごとく
よみがへるとつゞく枕詞
反歌
言等波奴木尚春開秋都氣波毛美知遅良久波常乎奈美

許曾
こと〳〵ぬきもはるさけるとき。あきづけばもみぢちらくハ。つねをなみこそ
ちらくハちるを延ていふ。常をなみこそハ。世のなかのつねなさをさとりて。まへの
ハあはれといへる
一云　常無牟等曾（ツネナケムトゾ）
宇都世美能常無見者世間爾情都氣受氏念日曾於保伎
うつせみのつねなきみれば。よのなかにこゝろつけずておもふひぞおほき
心つけずハいはゆる執着せぬこと。おもふハ世間のありさまを観念するこ
一云　嘆（ナゲク）日曾於保吉
豫作七夕歌一首
妹之袖和禮枕可牟河湍爾霧多知和多禮左欲布氣奴刀
爾

いもがそでやれまくらこのんかハのせうきふらちやられよのふなぬとふ
果五理のうのま人のひざのへとがまくらこのん以下まて從この年とまて、
又集中柳のづらきとしよろくきて。かんを注する詞之、とふハ此ふの略
之、彦良等のんとよめり、字音ちゝ刀ふハ此句集中まて年し、刀ハ外トまて從字
内よとりよと同さこえ、外と内とハ反對なるふ同さとなるゆゑハ、外ふも
りよハあちらを内ふしていひ、内ふていふハこちらを内ふして云ん、さようけ
ぬ外トよハ、更ちる方を内よして云ん、從字の表ふけぬ内まていよハ、背の
方を内ふして云とといひてり、此言よりよく出つると、字音の位をきるるま
ふ、おくれられどこゝる事なるふ、於考べし

慕振勇士之名歌一首并短歌

知智乃實乃父能美許等波播蘇葉乃母能美己等於保呂
ちゝのみのちゝのみことはゝそばのはゝのみことおほろ

可爾情盡而念良牟其子奈禮夜母　丈夫夜　無奈之
かにこゝろつくしておもふらん、そのこなれやも、ますらをやむなし
久可在梓弓　須惠布理於許之投矢毛知千尋射和多
くあるべきあづさゆみすゑふりおこし、なぐやもちちひろいわた
之劒刀許思爾等理波伎安之比奇能八峯布美越左之麻
しつるぎたちこしにとりはきあしびきのやつをふみこえさしま
久流情不障後代乃可多利都具倍久名乎多都倍志母
くるこゝろさやらずのちのよのかたりつぐべくなをたつべしも
ちゝのみの、ちゝハ此枕詞、実をかはく寶と為る、元暦本よくよく改む、
おほろかハ疎かと、ことなれやも、それも前のにあくく、自らをさし
いつるん、投矢ハ集中なぐるさとしよも同じ、神代紀於是取矢還投下
そこしいてり、投ハ射遣之、さしまくるハ差任る之、不障さやらずとよむべし

神武紀にさぎハ佐夜藍聰(サヤラズ)いもくハしくじら佐夜離(リ)、さそえいあるとお
ぼへどころに佐夜利奴あざるべくさしまくるへさやうなる二句
絶あるべき句の落つるなるらん。後のよみかたうつべくハ後の代の人の
といちんがてし

反歌

丈夫者。名乎之立倍之。後代爾。聞繼人毛。可多里都具我禰

ますらをハなをしたつべしのちのよにききつぐひとも。かたりつぐがね

名をしのしハ助辞、がねハ後をかねて待ことの辞なりと既にいへり

右二首追和山上憶良臣作歌　是ハ憶良の歌に、ますらをやむなしかるべき万世に語続べき名をたてずして、といへるを追和せるる

詠霍公鳥幷時花謌一首幷短歌

毎時爾。伊夜目都良之久。八千種爾。草木花左伎。喧鳥乃。

ときごとにいやめづらしく。やちくさにくさきはなさき。なくとりの。

音毛更布。耳爾聞。眼爾視其等爾。宇知歎。之奈要

こゑもかはらふ。みみにきき。めにみるごとに。うちなげき。しなえ

宇良夫禮。之努比都追。有爭波之爾。許能久禮罷。四月之立

うらぶれ。しぬびつつ。あらそふはしに。このくれやうづきしたて

者。欲其夜理爾。鳴霍公鳥。從古昔。可多理都藝都流。鶯之

ば。よごもりに。なくほととぎす。いにしへゆかたりつぎつるうぐひすの

宇都之眞子可母。菖蒲。花橘乎。嬬良我。珠貫

うつしまこかも。あやめぐさはなたちばなを。をとめらが。たまぬく

麻泥爾。赤根刺。晝波之賣良爾。安之比奇乃。八丘飛超

までに。あかねさすひるはしめらに。あしひきのやつをとびこえ。

夜干玉之。夜者須我良爾。曉。月爾向而。往還

ぬばたまの。よるはすがらに。あかときの。つきにむかひて。ゆきかへり。

喧等余牟禮杼。何如将飽足

なきとよむれど。いかであきたらん

かへらふはかへるを延言、さきにいへれば卷二反歌のおもひ出ま
ゑらく、卷十四、花をおもひ出るとも、などいへり、あらそふもせ
しに、卷二十六の、ゆくへのあらそふことにあり、もしは同之、花を
をらくあらそふ木の、かくらのあるを、ちくぎれといへるにて、之、
梅に有争の有は相の語なりん、卷二相競、卷十相争、ともにあら
そふことなり、宮古毛争は木の語なく、あはくるなるべし、あらそふと云
ふ此事に由なしといふ、釋考でし、このくれは木の暗之、羅は借字にて闇之、
宮古は羅は能の語にて、このくれのならんといへり、よくてあは夜籠之、
暮のうつるまでも、卷九ちくぎれその上に、暮のかひこの中に

ちくぎれひとつとなれてとよあかうつしは愛妻をとうつくしづまてよあ
れば、うつくしのくを略るなるべし、宮古はうつは現なりんといへり、まてら
卷九人ならば母のまなるべしよあるまなそにいふは同じく、宮の
をとりよ、あるは生めらは卷十三盡者終尓とあり

反歌二首

毎時彌米頭良之久。咲花乎。折毛不折毛。見良久之余志母

ときごとに。いやめづらしく。さくはなを。をりもをらずも。みらくしよしも

毎年爾。来喧毛能由恵。霍公鳥。聞婆之努波久。不相日乎於保美

としのはに。きなくものゆゑ。ほとゝぎす。きけばしぬばく。あはぬひをおほみ

毎年はあるものをあるそのとのことく、しぬばくはしぬぶを延言、あはぬひはきた
ぬとりはすぎぬとし

毎年謂之等之乃波　此歌活本元暦本ふなくて元暦本なるを
らしごとふとよまり
右二十日雖未及時依興豫作也
為家婦贈在京尊母所誂作歌一首并短歌　家婦ハ坂上大
娘、尊母ハ大伴坂上郎女之
霍公鳥来喧五月雨　笑爾保布　花橘乃香吉
ほとゝぎすきなくさつきにさきにほふはなたちばなのかぐはしき
於夜能御言朝暮爾不聞日麻禰久安麻射可流夷爾之居
おやのみことあさよひにきかぬひまねくあまざかるひなにしをれ
者安之比奇乃山乃多乎里爾立雲乎余曽能未見都追嘆
ばあしびきのやまのたをりにたつくもをよそのみみつゝなげく
蘇良夜須家久奈久爾念蘇良苦伎毛能乎奈呉乃海部之

そらやすけくなくにおもふそらくるしきものをなごのあまの
潜取云　真珠乃　見我保之御面多太向　将見時
かづきとるちふしらたまのみがほしみおもわたゞむかひみんとき
麻泥波松柏乃佐賀延伊麻佐禰　尊安我吉美
まではまつかへのさかえいまさねたふときあがきみ

御面謂之美於毛和
笑を笑ヰ謂れて、香吉かをよしみとよめれど謂なし、吉ハきのかな
ゆゑるゝ、おやのみことハこをかけるごとく御言之、きこのみほまねくハ殿
よ宮ものいつるあく、数あきこすまり須あく、集中例多し、男なくとて
いきとこれど、此親のことゝと、父の命母の命とし、聞ハ関の謂をそへかけ
ぬひまねことよまんのともねのいそれしハよのつぎ、山のことをかへたるを
さる所とりて、やもえくちく本、岩千七ずも此詞出、安きのうきく　ふく

りは同じ、しらたまのかずはかぎりなきをいはんとて冠らせたり、清しお
もわ、其九の巻に月のみてる面輪ともよめり、栢は和名抄に柏一名掬 和名加閉 柏
實一名梔子などいへるあれど、今かやといへる木之閉と也と遅れどはよ
訛れるにや、もろこしにて松柏とつゞく常葉なるものなれば今
かくよめるにや、いまだ見ねばいはまほしとぞ

反歌一首

白玉之見我保之君乎不見久爾夷爾之乎禮婆伊家流等毛奈之
しらたまのみがほしきみをみずひさにひなにしをればいけるともなし
是は親をさして、多く生りとも有しとよめりはるなるも同じ、言ゆゑには
いけりともなしといふとは異之、とは利心などの利にて、集中に心神もなしと
あるもいけるともなしとよまんといへり、猶考べし

二十四日應立夏四月節也、因此二十三日之暮忽思霍
公鳥暁喧聲作歌二首

常人毛起都追聞曽霍公鳥此暁爾来喧始音
つねびとも、おきつゝきくぞほとゝぎすこのあかときにきなくはつこゑ
常人は家のことゝせの人をいふて、立夏に必鳴べきなりとまちて
よめるなり

霍公鳥来鳴響者草等良年花橘乎屋戸爾波不殖而
ほとゝぎすきなきとよまばくさとらんはなたちばなをやどにはうゑずて
其十の巻に月夜よみ鳴ほとゝぎす見まくほり吾草とれり見ん人もがも
言を借て此吾草は今の俗にまくらことばといふ、なをとるといひて
その木の枝にとまるをいひて、宿には殖ずしてほかのとまるべき花
橘を庭に植んものとかまへてと慮るなどといひて

苑ヲ苑ニ誤

贈京丹比家歌一首

妹乎不見越國敝爾經年婆吾情度乃奈具流日毛無

いもをみずこしのくにべにとしふればわがこゝろどのなぐるひもなし

こゝろどハ上ニ出たり、なぐるハなぐさむ也

追和筑紫太宰之時春苑梅謌一首　苑を花ニ誤

春裏之樂終者梅花手折乎伎都追遊爾可有

はるのうちのたぬしきをへばうめのはなたをりをきつゝあそびにあるべし

是ハ梅の宴のことをおもふる中にて、むかし立まへしまてろがくしこそ

うめをかざしてあそびしをもとめ、又梅の花をおりてかざせる諸人ハ此よの

あそびハあそびくるべし、はなのよのおもひゞきてあしきことをいへバ、

こゝハ雪のきえてのきなみハちりかゝるとて、手伎つを置つゝしてハちる

遠つかく手折来て遊ぶなるてハ理りしかえぞ、乎伎ハ毛伎の誤なる、

たをりてもちてなんと言ちがひつるぞよみたる為にそれき

右一首二十七日依興作之

詠霍公鳥歌二首

霍公鳥今来喧曾無菖蒲可都良久麻泥爾加流流日安良米也

ほとゝぎすいまきなきそむあやめぐさかつらくまでにかるゝひあらめや

それハ始之、かづらくハ上ニ出、かるゝハ離之

毛能波三箇辭闕之　此三の字を除くとあるハ、右七首ニ同じき

ドなるこゝのちがひハ数なり

我門従喧過度霍公鳥伊夜奈都可之久雖聞飽不足

わがかどゆなきすぎわたるほとゝぎすいやなつかしくきけどあきたらず

毛能波氐爾乎六箇辭闕之　此六字をまじへずよめるハ、それがちの

づのとふハあくて、こよくしに除くるゝ、此ふへちるまゝ助辞ま用ゐるてき
ふくれを除くいふとかきたなよ、かつく除くるまやあらん

四月三日贈越前判官大伴宿禰池主霍公鳥歌不勝感
舊之意述懐一首并短歌

和我勢故等。手携而。暁来者。出立向。暮去者。
わがせことてたづさハりてあけくれバいでたちむかひゆふされハ。
振放見都追。念暢。見奈疑之山。尓八峯尓波。霞多奈
ふりさけみつゝおもひのべみなぎしやまにやつをにハかすみたな
嫓伎。谿敝尓波。海石榴花咲。宇良悲。春之過者。
びきたにべにハつばきさきうらがなしはるしすぐれバ。
霍公鳥。伊也之伎喧奴。獨耳。聞婆不怜毛。君與吾。
ほとゝぎすいやしきなきぬひとりのみきけバさぶしもきみとわれ。

隔而戀流利波山。飛超去而。明立者。松之佐枝尓。
へだてこふるとなみやまとびこえゆきてあけたてバまつのさえだに。
暮去者。向月而。菖蒲。玉貫麻泥尓。鳴等余米。
ゆふさらバつきにむかひてあやめぐさたまぬくまでになきとよめ。
安寐不令宿。君乎奈夜麻勢
やすいしなさずきみをなやませ

せこハ池主をさす。今本念鴨と元暦本に念暢とあるによりて、おもひのべ
とよめり。さもあるべし。みなぎしハ目もて今を和せしといふ。此下の歌
ふへるひとに情なき顔をもよおかし、やつをふハこゝらの谷にて池を
とし同じく越中ありつをとしし。池ハ越前を揺めく隔り居るよしを
いふなかくいつて、をきこをきあふハ重鳴て、となみ山越中、あやめ
ぐさハ五月まで鳴けとりなく、やすいしなさずてとハ鶯ほくきに

ところくさびしさに堪ぬあまりに、池主が住まへも恋行て、池主がん
思ひ動さしめよとほとゝぎすにおもひそへるごとく、ふかあるべし、寒き夜
周伊斯奈作農とあれバ、さしもそのよむべし

反歌

吾耳聞婆不怜毛霍公鳥丹生之山邊爾伊去鳴爾毛
ひとりのみきけバさぶしもほとゝぎすにふのやまべにいゆきなかにも
和名抄 越前国丹生郡丹生あり、ちくらずまくハことなり、爾ハ
南の誤にて、なそのなしとよむべきこ
霍公鳥夜喧乎為管我世兒乎安宿勿令寢由米情在
ほとゝぎすよなきをしつゝわがせこをやすいしなさすゆめこゝろあれ
せこハ池主をさして、君のちぎりのあるところを同じ、つゝめくこゝろまて
鳴けりしといふ

不飽感霍公鳥之情述懐作歌一首并短歌
春過而 夏来向者 足檜木乃山呼等余米左夜中爾
はるすぎてなつきむかへばあしひきのやまよびとよめさよなかに
鳴霍公鳥 始音乎 聞婆奈都可之 昌蒲 花橘乎
なくほとゝぎすはつこゑをきけバなつかしあやめぐさはなたちばなを
貫交可頭良沼久麻而爾里響喧渡禮騰母尚之努波由
ぬきまじへかづらくまでにさとゝよめなきわたれどもなほししぬばゆ
良の下沼ハ衍文なるべし、かづらくまでゝよむべし、麻の下而ハ屠な
泥に作るをよしとす、六帖の小もとつし又数こ言ハ首の誤なるべし

反歌三首

左夜深而暁月爾影所見而喧霍公鳥聞者夏借
さよふけてあかときづきにかげみえてなくほとゝぎすきけバなつかし

霍公鳥雖聞不足網取爾獲而奈都氣奈可禮愛鳴金
ほとゝぎすきけどもあかずあみとりにとりてなつけなかれずなくがね
網まてあみどりとはあみをもてとるをいふなつくるはなつけんとなりがねは設て待

霍公鳥飼通良婆今年經而來向夏波麻豆將喧孚
ほとゝぎすかひとほせらばことしへてきむかふなつはまづなきなんを
きむかふ夏ハきたらん年の夏をいふ

従京師贈來歌一首　此末にいふこゝろ二そあるべく、そこの後
ふ此うたハ京の家ふ留まる家持ての妹より、越中の家持ての妻
へ贈れるよしなり

山吹乃花執持而都禮毛奈久可禮爾之妹乎之努比都流
可毛
やまぶきのはなとりもちてつれもなくかれにしいもをしのびつるかも

此末なることゝ妻によし、妹よりおくるうたとみえしよりよめり、然れば女ハ互よ
いもといふ例あるべし、男どちも互に君せことよぶがごとし、仁賢紀にも、
古者不言兄弟長幼、女以男称兄、男以女称妹、故云於母亦兄於吾亦兄
耳、かれよしハ離去しく、妹ハ家持ての妻をさして

右四月五日従留女之女郎所送也　留の下の女ハ郷か京の
誤なるべし、郎今良に誤る

詠山振花歌一首并短歌
宇都世美波戀乎繁美登春麻氣氏念繁波引攀而
うつせみはこひをしげみとはるまけておもひしげゝばひきよぢて
折毛不折毛毎見情奈疑牟等繁山之谿敝爾
をりもをらずもみるごとにこゝろなぎさんとしげやまのたにべに
生流山振乎屋戸爾引植而朝露爾仁保敝流花乎

おふるやまぶきをやどにひきうゑてあさつゆにゝほへる花を。
毎見。　念者不止。　戀志繁母
みるごとにおもひはやまずこひしげしも
江家　此二字ハ衍字なるべし
うつせみハ現身之、こひしげれバものおもひ、わすれかねつも山吹を植て
もえでおもひしてもみるくにをあげさまんといふ、かく情をもちてさ
まんとて植れバやよふくる毎に念の止ことハなくて、こひのしげきとこ
反詞　今詩を詠む謂
山吹乎屋戸爾植氐波見其等爾念者不止戀己曽益禮
やまぶきをやどにうゑてハみるごとにおもひハやまずこひこそまされ
六日遊覧布勢水海作歌一首并短歌
念度知。　大夫能。　許能久禮。　繁思乎。　見明良米
ねもころに、ちりまがふ、をのこのこのくれのしげきおもひを、みあきらめ
情也良牟等布勢乃海爾小船都良奈米真可伊可氣伊許
こゝろやらむと、ふせのうみに、をぶねつらなめ、まかいかけいこ
藝米具禮婆乎布能浦爾霞多奈比伎垂姫爾　藤浪
ぎめぐれバ、をふのうらに、かすみたなびき、たるひめに、ふぢなみ
咲而。　濱浄久。　白浪左和伎。　及及爾戀波末佐禮杼
さきて、はまきよく、しらなみさわき、しくしくにこひハまされど
今日耳。　飽足米夜母。　如是己曽。　彌年能波爾。　春花之
けふのみに、あきたらめやも、かくしこそ、いやとしのはに、はるはなの
繁盛爾。　秋葉能黄色時爾。　安里我欲比。　見都追
しげきさかりに、あきのはの、もみぢのときに、ありがよひ、みつゝ
思努波米。此布勢能海乎

しぬだめこのよせのみを
久れの下乃を暁せるに、この久れハ木の下やみにさて、木の久れのめぐ
りをとこめて鰹きよすよしなりとぞ。つらなるは連なるにて、巻十五
いざりするあまのをとめハ舟よのつらに浮かへりとよめるをよの
浦、意姫、蓋子越中よまむ、ちゝくさなハまでさねどこは此ぶりと見て
かくおもへるこゝろハあれど、あくまりハあらさえ、黄色附衣、巻十七
秋さらバ毛美知能（モミヂ）等伎（トキ）尓とあれバこゝも志ものよめり

反歌

藤奈美能、花盛尓、如此許曽、浦己藝廻都追、年尓之努波米
ふぢなみのさかりのにかくしてぞうらこぎたみつゝとしにしぬばめ
此しぬだめハ有ちにふりくる花をめで慕ふことゝぞ

贈水烏越前判官大伴宿祢池主歌一首并短歌

今等毛ト有ノ毛ハ衍文

浙ヲ泝ニ誤

和名抄鸕鷀辨色立成云大曰鸕𪀚日本紀私記志万豆止利小曰鵜鶘俗云字、尓雅
註云鸕𪀚水鳥也とぞ、按ニ此鳥ハ烏の誤なるべし

天離、夷等之在者、彼所此間毛同許己呂曽、離家
あまざかるひなにしあれバそこもこゝもおやじこゝろぞ。いへさかり
等之乃經去者、宇都勢美波、物念之氣思、曽許由恵尓、情奈
としのへぬれバうつせみハものもひしげしそこゆゑにこゝろな
具左尓、霍公鳥、喧始音乎、橘、珠尓安倍
ぐさにほとゝぎすなくはつこゑをたちばなのたまにあへ
貫可頭良伎氐、遊波之母、麻須良乎等毛、奈倍立而
ぬきかづらきてあそばしもますらをともなへたてゝ
叔羅河、奈頭左比泝、平瀬尓波、左泥刺渡、早
しくらがはなづさひのぼりひらせにはさでさしわたしはや

烏ヲ鳥ニ誤

湍雨波水烏乎潜都追月雨日雨之可志安蘇婆補波之伎
せゝはうをかづけて。つきにひに。しかしあそばね。はしき
和我勢故
わがせこ

江家　此二字元唐本によりて削べし、

あへぬきハ相貫之、遊波之母、旧訓たハるれバしかとあれどこゝろしえ皆
字のまゝなれ、よりあり宣長云こハ遊波久与之母(アフバクヨシモ)なると、久与の二字脱たる
なるべし、此ある上よりてゆゑにといへるを思へバ此遊ぞくの句まさくい
歌ぬ様てみづからのうをいへるにて、さて次のまとゝろもてといひより此をも
のみえ、されバ一ぞのことハ、吾もともつかしくて遊べバ心すゞしくよろ
しくるなえ、わがせこもともかしく遊びたまへといへるといへり、等毛今
本等毛毛とあて、一の毛ハ衍文なと、とさるこハ今伴のことさ、此よきて此詞なと、

我下波ヲ婆ニ誤

翁説叔羅河ハ越前人ヨ今府ヨ白鬼女(シラキメ)河あり、神名帳越前敦賀
白城(シラキ)神社、又信露貴(シロキ)神社あり、されバ此叔ハ新の誤りにて、しらき川
なるべしといへり、元唐本叔を弥とあれバ彌字をとし、又或人云神
名帳越前大野郡篠座(シヌクラ)神社あり、しくら川ハこれにといへり、此説もよし、
平瀬ハあさせのみにてゆるやかなる瀬をいふべし、水鳥と本に従て水鳥を
作る、ここに反哥二そとゝるべきことをみせり

叔羅河湍乎尋都追和我勢故波宇河波多多佐補情奈具
左爾
しくらがハせをたづねて。わがせこは。うかはたゝさね。こゝろなぐさに

江家　そと元唐本なきに削べし

たゝさねハたゝせを延べることく、此歌一移川をしといふによいて

鸕河立取左牟安由能之我波多婆五百等爾可伎無氣念之

余朱ヲ下ト二朱余ト誤リ

とりもてるまそかゞみふたがみやまにこのくれのしげきたにべを
呼等余奈旦飛渡　暮月夜可蘇氣伎野邊　遙遙爾
よびとよめあさとびわたりゆふづくよかそけきのべにはろ〳〵に
喧霍公鳥立久久等　羽觸爾知良須藤浪乃　花奈都
なくほとゝぎすたちくゝとはぶりにちらすふぢなみのはなゝつ
可之美引攀而袖爾古伎禮都　染婆染等母
かしみひきよぢてそでにこきれつそまばそむとも
ゑみまがりハ笑曲りて眉のまがめるかたちをいふ又ゑみまけのけと
のつゞかれといふとれをあんをしくゑみまがりといつるかゑみまけ
ハ笑彼之胡貌にてハ猿とみえる之真鏡といふまでハみなくいさん序
のミ呼等余奈をとめそらめかす訓されどよろしからず呼等余余ハ字ちがえ
呼等余呆とまりしと誤りしるしといふかくてくきハ遊にありし此下にも

念婆
うのはなもちらさんあゆのせのはなはわれにかきむけおもひしもへ
萬葉のいえれど今本婆多婆とあて上の婆を何か本波に作る波多婆
ハ鰭者之ひれをいふかきの詞にてむけハ君に勝りてせられとおもひ
おもふてなるらべしとはよめるべしあけよくはよの詞を異くハ古言の例之
右九日附使贈之
詠霍公鳥并藤花一首并短歌
桃花　紅色爾　爾保比多流　面輪能宇知爾　青柳乃
ものゝなくれなゐいろにほひたるおもわのうちにあをやぎの
細眉根乎　咲麻我理　朝影見都追　嬬嬬良我　手爾
ほそきまゆねをゑみまがりあさかげみつゝをとめらがてに
取持有　真鏡　蓋上山爾　許能久禮乃　繁溪邊乎

此風のかなしきとよめり、夕月の影を見、なくてハなくこゑ、こきれつゝハ、
こきハかきる也、しく、詞なく、かき入つゝ、其ハ打よせくちるがちるべき梅
の花袖に古寸入津(コキレツ)そまばそむてとあり、古く集なみちぢり袖にこきれ
てそているんとよめるも同じ、こゝに反歌と有べし

霍公鳥鳴羽觸尓毛落尓家利盛過良志藤奈美能花
ほとゝぎすなくはぶれにもちりにけりさかりすぐらしふぢなみのはな
一云落奴倍美(チリヌベミ)袖尓(ソデニ)古伎禮都(コキレツ)藤浪乃花也　同九日作之
也の字ハ添てよめるのミ

更怨霍公鳥喧晩歌三首

霍公鳥喧渡奴等告禮騰毛吾聞都我受花波須疑都追
ほとゝぎすなきわたりぬとつぐれどもわれきゝつがずはなはすぎつゝ
きゝつがずハ一こゑびゆく、ほとゝぎすの後ぬとみえ、よろしく端作に更怨とあり、

花ハ上の藤をいふ

吾幾許斯奴波久不知尓霍公鳥伊頭敝能山乎鳴可將超
わがこゝだしのぶらくしらにほとゝぎすいづべの山をなきかこゆらん
しのぶハ慕ふを延ていふ、いづべハいづれの方、其二杉の田のなくなき
よ歌ある何時邊乃方(イヅベノカタ)によそのなきやまん

月立之日欲里乎伎都追敲自努比麻低騰奈可奴霍公鳥可母
つきたちしひよりをきつゝうちしのびまてどなかぬほとゝぎすかも
乎伎ハ招の古語也、其十七数歴の歌に乎久(ヲク)よしのそこになくれバ又
招き集へふそし度のをき餌をよんとするもそめく、郭公の来
づき餌をもとまうけく招といへるやあらん、自ハ濁言みのゝ用ふ、
されバ上のをよみつゞけいふ、何ハ文字使にて濁べきこの、又ハ自ハ四の字

の横竪に經わたるに活なさんとするなるべし、契沖云この月たち
といふは立夏より、四月の節に入よりは自ずなくくるしくきこゆるは、四
月たちてよりなきてといへり

贈京人歌二首 上に從京師贈來といへるにあたる和之

妹爾似草等見之欲里吾標之野邊之山吹誰可手乎里之
いもににるくさとみしよりわがしめしのべのやまぶきたれかたをりし
よく山吹の花より捨てつれなくよりすに二首めてこふる之女の立
姿とりわすれこれにて、是七首にある等とこるよりわが思し
野山の佛等人なりけりね

都禮毋奈久可禮爾之毛能登人者雖云不相日麻禰美念曾吾爲流
つれなくかれにしものとひとはいへどあはぬひまねみおもひぞわがする

上の贈歌の三四の句にあてゝこたへり、つれなくとは、吾をつれな
しといへりしなるべし、人とは郷に留る家持の妹をさして、まねくは
ハ信の數多きなるよしいへり

右爲贈留女之女郎所誂家婦作也　女郎者即大伴家持之妹
留女の女はよまいつるごとく京の留守なるべし、家婦は家持の妻

十二日遊覽布勢水海船泊於多祜灣望見藤花各述懷作歌四首　祜は祐に似たり、元暦本によりて改

藤奈美能影成海之底清美之都久石乎毛珠等曾吾見流
ふぢなみのかげなるうみのそこきよみしづくいしをもたまとぞわがみる
かげは姿也、是七首の處まで白玉ともみえし、水底なる物の
みゆるをいふ也

守大伴宿禰家持

祜ヲ祜ニ誤
下同

多祜乃浦能底左倍爾保布藤奈美乎加射之氐将去不見人之為
たこのうらのそこさへにほふふぢなみをかざしてゆかんみぬひとのため

次官内蔵忌寸縄麻呂
伊佐左可爾念而来之乎多祜乃浦爾開流藤見而一夜可經
いさゝかにおもひてこしをたこのうらにさけるふぢみてひとよへぬべし
いさゝかハかりそめのこと巻八まそのをすゝきれつみかとこゝろれでゆき
をまつのしゝ一よねふくる

判官久米朝臣廣縄
藤奈美乎借廬爾造灣廻為流人等波不知爾海人等可見良牟
ふぢなみをかりほにつくりうらみするひとゝハしらにあまとかみらん
灣廻ハ海人のよけちるさまをいふ、ちいさりのよハ冠辞考ニ
委し、藤の花をかり庵としてみやびなさく、遊などするみやびをもちら
で、よのつねの海人と人のみるらんといふ也

久米朝臣繼（ツグ）麻呂
恨霍公鳥不喧歌一首
家爾去而奈爾乎将語安之比奇能山霍公鳥一音毛奈家
いへにゆきてなにをかたらんあしびきのやまほとゝぎすひとこゑもなけ
こゝハたゞ日じけのなとゆるゝ

判官久米朝臣廣縄
見攀折保（ホ）寶（ホカ）葉（シハ）歌（ヲ）二首
和名抄本草云厚朴一名厚皮揚氏漢語抄云厚木 保々加之波乃木、今ほをのきといふ

吾勢故我捧而持流保寳我之婆安多可毛似加青蓋

わのせこがさゝげてもてるほゝがしハあたかもにるかあをききぬがさ

儀制令に三位以上蓋を用ふることみえて一位ハ深緑なり、ほゝがしハ葉広きものゆゑ、かくいひて、あをきぬがさハよく似たることを云詞也

講師僧恵行

皇祖神之遠御代三世波射布折酒飲等伊布曾此保寳我之波

すめろぎのとほきみよゝにはしきをりさけのむといふぞこのほゝがしハ

御代ゝ世々なれど借字にて御代々のこゝろいハ数語、しきをりハ折敷といふこゝろ、古へハ物を盛るに木の枝葉などを折敷し、書紀葉盤ハ枚（葉盤此云毗羅耐）、和名抄云本朝式云十一月辰日宴會其飲器參議以上朱漆椀五位以上葉椀、和語云久保天、又漢語抄云葉手、比良天、ちなみに、膳夫をかしハで

といふも此よしなり、宣長云布折ハ析布を下上に誤れるものにて、析酒飲みハさくらのみといふことなれバ布ハ誤字なること二の句の波といふ字も猶なるらねバ波ハ二の句へつきて、なほ誤字もあるべしといへり、考べし

末ヲ未ニ誤

守大伴宿禰家持

還時濱上仰見月光歌一首

之夫多爾手指而吾行此濱爾月夜安伎氏牟馬之末時停息

しぶたにをさしてわがゆくこのはまにつくよあきてむうましばしとめ

つくよあきてむハ月をあくまでみんとなり、うましばしとめハ暫之さてそのこゝろにて、とめよのこゝろにて保古こそかくるべし、ましと今本未とあるハ誤也

守大伴宿禰家持

二十二日贈判官久米朝臣廣繩霍公鳥歌怨恨歌一首

并短歌　上の歌の字官本によりて衍文とす
此間爾之氐曾我比爾所見和我勢故我垣都能谿爾安氣
ここにしてそがひにみゆるわがせこがかきつのたにゝあけ
左禮婆榛之狹枝爾暮左禮婆藤之繁美爾遙遙爾
されば、はりのさえだにゆふされば、ふぢのしげみにはろ〴〵に
鳴霍公鳥　吾屋戸能殖木橘　花爾知流時乎
なくほとゝぎす、わがやどのうゑきたちばなはなにちるときを
麻多之美伎奈加奈久曾許波不怨之可禮杼毛谷可多
まだしみきなかなくそこはうらみずあれども、たにかた
頭伎氐家居有君之聞都都追氣奈久毛宇之
づきていへをれるきみがきゝつゝつげなくもうし
わがせこハ廣繩をさして、垣津能谿、時来りて鳴の鳴し可伎都とて

よこ、毛八君妹がやどの垣内のさゆり花などゝあれバ、垣都ハ垣内にて
くねなど結回らしてある所をいふなるべし、榛ハ雄略紀の云のをかぐえ
と同じく、今はんの木といふものなるよし既にいへり、うゑ木橘ハ庭に栽
たる橘といふ也、時をまだしみハ此時四月なれバ、橘の花の咲べき時を待
とてなくのにハうらみずといふ、言ふまでもなし八後世のいふよつねに
或本まだきといふと同じゆふといふ意なるべし、さもあらざるハきこえなのぬ
を延ぶり、谷かたづきてハ、廣十あしびきの山かたづきてとよめるに同じ
反歌一首
吾幾許麻氐騰来不鳴霍公鳥比等里聞都追不告君可母
わがこゝだまてどきなかぬほとゝぎす、ひとりきゝつゝつげぬきみかも
詠霍公鳥歌一首并短歌
多爾知可久伊敝波乎禮騰母許太加久氐佐刀波安禮騰

たにちかくいへハをれど。このくれてさとハあれど
母保登等藝須伊麻太伎奈加受奈久許恵乎伎可麻久保
もほとゝぎすいまだきなかずなくこゑをきかまくほ
理登安志太爾波可度爾伊氏多知由布敝爾波多爾手美
りとあしたにハかどにいでゝたちゆふべにハたにをみ
和多之古布禮騰毛比等己恵太爾母伊麻太伎己要受
わたしこふれども。ひとこゑだにもいまだきこえず
このくれハ木高くきゝらきくほりとハ、ずんすと欲(かり)をとて此もとあ
一その内太、ひつハ濁音に用、一つハ清音に用ゆ、たゞ此書ハ清濁と
たがひて元暦本ニ反歌の字なく今本ニ從せり
敷治奈美乃志氣里波須疑奴安志比紀乃夜麻保登等藝
須奈騰可伎奈賀奴

ふぢなみのしげりハすぎぬあしびきのやまほとゝぎすなどかきなかぬ
しげりハ繁く盛といふがごとし
右二十三日掾久米朝臣廣縄和
追和處女墓歌一首并短歌　巻九ニ葦屋處女を詠る哥
二首短哥四首あり、それによりて和せるなり
古爾有家流和射乃久須婆之伎事跡言継知努
いにしへにありけるわざのくすばしきことゝいひつぐちぬ
乎登古宇奈比壮子乃宇都勢美能名乎競争登玉
をとこうなひをとこのうつせみのなをあらそふとたま
剋。壽毛須底氐。相争爾。嬬問為家留。孃嬬等之。
きはるいのちもすてゝあらそひにつまどひしけるをとめらが
聞者悲左。春花乃。爾太要盛而。秋葉之。爾保比爾

きけばかなしさはるばなのにほえさかえてあきのはのにほひに
照有、惜身之、壮尚、丈夫之、語労美、
てれるあたらそのさかりをすらもますらをのこといたはしみ
父母尓、啓別而、離家、海邊尓出立、朝暮尓、
ちゝはゝにまをしわかれていへさかりうみべにいでたちあさよひに
満来潮之、八隔浪尓、靡珠藻乃、節間毛、惜
みちくるしほのやへなみになびくたまものふしのまもをしき
命乎、露霜之過麻之尓家禮、奥墓乎、此間定而、
いのちをつゆしものすぎましにけれおくつきをこゝとさだめて
後代之、聞継人毛、伊也遠尓、思努比尓勢餘等、黄楊小
のちのよのきゝつぐひともいやとほにしぬびにせよとつげを
櫛之、賀左志家良之、生而靡有

くしさしけらしおひてなびけり
くすばしき、巻十八七夕歌にもあやに久須之弥とよめり、
奇(アヤ)しき、くすしきといふ言同じこと也、称徳紀宣命に久須之久事乎思議許止
極難之とあり、源氏物語ほうげづきくすしからん、これは後のおぼゆるか摂
のあみくましといつるハいたく誤るものぞ、知奴ハ和泉、宇奈比ハ摂津
菟原ハ、巻九長歌に菟原とし、菟名負とし、又菟會などかけるを並べ、
菟原やがてうなひとよむべし、原をふとよめバ、ひに通ハしてうなひと
よめるぞ、相争尓、上に競争登とありて、又相争とかけハいづれも尓の
言もいひ争ハ具などの誤なるべし、こゝハあひとすべくとあるの、きけ
ばかなしさハ、これまでことしのつまどひしけるをしらせてめらくのなるをさして
いふなしさといふ、尓太要盛而、この尓ハ志の誤、太ハ太尓の誤ぞ、にほ
えさかえてあるべし、まつく秋く枝の紅葉するをいへりと為ハいへれ

年ハされど年十三に太遅（ニホヘル）この遥ハ遅の誤り 越賣（ヲトメ）とてまろく〳〵つの年ざまにゆく太、
翁の後も定めがたし、孝行ある女の壮を荘に誤る、丈夫のことにて判じ
父母にまたなしかれてハ年九十に母にかはりてしづくまさしやしき
事のら丈夫のあらそふよしなれバいかりとしてあらそふ、あれやしろくろ
よみにまくらんとこととはかる同じきことの節の名にちらして、こハ猶く
の名も惜き命といへることを、さましふりれ、俗のかれバのバを略かるる、
黄楊小櫛しつのさしくらしハ、其女がつけの櫛をちかさしたるが生
茂りつとはいひ傳へて、ひさしくあるなるべし、年九十にして墓のへの
木のなびけるをみて、ちぬをとこのみしよるべけらしも
乎等女等之後能表跡黄楊小櫛生更生而靡家良思母
をとめらがのちのしるしとつげをぐしおひかはりおひてなびきけらしも
初にいひし又生かはりてしたしかりの如くなびくと

右五月六日依興大伴宿禰家持作之
安由乎疾美奈呉能浦廻爾與須流浪伊夜千重之伎爾戀
渡可母
あゆをいたみなごのうらまによするなみいやちへしきにこひわたるかも
あゆハ東風の又歌也、よハ寄へしきといはん為のこと
右一首贈京丹比家

圖書局文庫

国立公文書館
National Archives of Japan